
Sacrifice Diary ～ただ望むのは～

紫夜河 太桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Sacrifice Diary ￣ただ望むのは

【Nコード】

N6419K

【作者名】

紫夜河 太桜

【あらすじ】

ただ、俺はあいつの望みを叶えてやりたかった。

そして、もう少しだけ、あいつの傍に居たかったんだ。

これは全部俺の我が儘だって分かっているけど――……。――。

ある日、悪魔は目の前で片思いをしている相手の少女を失ってしまった。

愛しい少女を取り戻す為、悪魔は一冊の日記帳を彼女に与える――
……。

「Sacrifice Diary」を、悪魔――トリアの目線で書いた作品です。

命の灯（前書き）

この物語は「Sacrifice Diary」を、悪魔——トリアの目線で書いた作品です。

初めに「Sacrifice Diary」を読むことをおすすめします。

ご意見、ご感想等、お待ちしております。

命の灯

ただ、俺はあいつの望みを叶えてやりたかった。

そしてもう少しだけ、あいつの傍^{そば}に居たかったんだ――。

何故か、今日はずっと嫌な予感がしていた。

俺は悪魔だから、そういうもの――特に不幸の気配なんかは、はつきりと分かる。

だけど今日は一段とそれが酷い。

――何だ？　この感じは。

そして、俺はその理由をすぐに理解することになる。

ふと、足下を見た。

広がるのは街並み。

空を飛んでいる俺の姿は地上の人間には決して見えないように魔術をかけている。

もしも空を飛んでいる俺を見られたりなんかしたら大騒ぎになるだろう。そんな事態を起こさないためだ。

街を見下ろしていると、一人の少女が信号待ちをしているのが見えた。

「あ……」

その少女は俺が片思いをしている相手。

きつと何処かに行くところだ。

俺は彼女の姿を見付けたことが嬉しくて微笑をこぼし、その上空

を通り過ぎようとした。

—— だけど、視界の端に凄い勢いで交差点へと向かう車が。

そして——……。

「危ないっ!!」

俺は思わず叫んだ。

横断歩道を途中まで渡った少女が足を止める——。

直後、彼女の姿が一瞬消えて——再び現れた彼女からは、命の灯は消えていた。

「あか……ね……」

信じられなかった。

信じたく……ない。

俺はすぐに、一つの方法を選ぶ。

彼女——あきやま あかね 暁山朱音を蘇らせよう、と……。

全く……

「おい、泣いてんじゃないよ。顔あげろ」

俺は不思議な景色の中、一人でうずくまっている少女を見下ろし、声をかける。

彼女は一瞬肩を震わせると、ぎこちない動きで顔を上げた。

急がなければ彼女の魂は黄泉へと下ってしまう——。

俺は一方的に話し掛ける。

「どうしてお前がここにいるのか分かっていいのか？ お前は信号無視で突っ込んできた車にはねられたんだ」

「はね……られた？」

うわごとのように繰り返す彼女に、俺は頷く。

「そうだ。ここは現世と黄泉の狭間にある世界。——簡単に言う
と、死者の国の入り口前。……つまり、お前は死んだってこと」

とりあえず、何も分かっていなさそうな様子の朱音に状況説明を
してやると、彼女は顔色を蒼白に変えた。

「死んだ？ 死んだって…私、死んじやったの!？」

ようやく自分の置かれた立場を理解したらしく、彼女はパニックを起こしていた。

「どっ…どどどっ、どっしよっ！？ 私、お母さんを残したまま
で死ねないよっ…！」

その言葉で、そういえば彼女が母子家庭なのを思い出す。

そして、俺はこのままでは話を続けられないので、仕方なく怒鳴ることにした。

「うるさいっ！ とりあえず人の話を聞け！ 騒ぐな、黙ってる！」

朱音はぴたりと口をつぐみ、俺は全く……と、溜め息をこぼした。

全く……（後書き）

……突然ですが、この物語の次の更新がだいぶ先になりそうです。

詳しくは活動報告を見てください。

本当にすみません……。

禁術（前書き）

お待たせしました……。

ようやく続きを投稿します。

では、どうぞ。

禁術

「で、俺は見ての通り悪魔だ。名はトリア」

「悪魔……………」

いつも彼女と接している時は人の姿をして別の名を名乗っている
ので本名を言っても大丈夫だろう。

そう考えて言った後、彼女が何処かショックを受けているような
のに気付いた。

—— 朱音のことだ。きっと悪魔が目の前にいるもんだから、自
分が地獄行きなのかとでも考えているに違いない。

俺は再び溜息を吐いた。

「朱音。とりあえず考えるのは俺の話が終わってからにしてくれ。後で質問があつたら聞いてやるから……」

「あれ？ 何で私の名前——」

「俺が悪魔だからに決まってるだろ」

彼女の問いに、内心ぎくりとするが何とか表情を変えずに俺はごく自然に答えた。

そして、朱音を見下ろし、決意する。

——これは呪い。俺自身の寿命すら縮める禁術。

右手に出現させたのは一冊の日記帳。

「ほら、これやる」

「わっ……………」

朱音は放り投げたそれをしっかりと受け止めると中を開き、首を傾げた。

「何、これ？ ノート……………」

「日記帳だ」

不思議そうにしている彼女に、説明する。

「この日記帳はただの日記帳じゃねーぞ？　これの表紙に死者が名前を書いて、日記を記すと、死者が現世に蘇られるっていう代物だ」

ペンを手渡すと、彼女は困ったように俺を見た。

「どうして……私に？」

——そりゃ普通は疑問に思うよな。

俺は苦笑し、これだけは嘘を吐かずに喋る。

「お前が死んじゃまうと俺が困るんだよ。悪魔には悪魔の都合がある。で、どーすんだ？　生き返るか、このまま死ぬか………」

二つに二つの選択を迫る。そして……。

「……………りたい。……生き返りたいに決まってるじゃない!」

少し間を置いてからの答えに、俺は安心した。

まさか（前書き）

いきなりですが少しタイトルを変えました。

まさか

「なら、とつと名前書いて一ページ目に今日の日記でも書け」

朱音はムツとしたように眉を寄せてから日記帳に名前を書くと、
内容を書きつづっていく。

彼女はしばらくの間、一生懸命に日記を付けていた。

俺はその最中、本当にこれでいいのかと自問自答していた。

この日記の力の代償は、あまりにも大きい。

そしてようやく書き終わったらしく、朱音から日記を受け取ると、
思わず微笑んだ。

——1ページが全て文字で埋め尽くされていたのだ。

「よく1ページ埋まったな。…上出来だ。いいか？　今、お前は魂だけの状態で、肉体は現世にある。もうすぐお前はこの日記帳の効果で蘇り、お前が死んだ日の翌日に目覚める。……ここからお前が書いた分だけ、——1ページ24行だから1行で1時間、1ページで1日生きられる。で、日記の文字は時間が経つと少しずつ、黒から薄い灰色に変わっていく。全部色が変われば、お前は今度こそ完全に死ぬことになるぞ。だから色が変わり終わるまでに次の日記を書け」

「が、頑張る……………」

朱音は一瞬怖じ気づいたようだ。

それというのも彼女は作文が苦手だからだろう。

今、ちらりと日記を読んだところ、文章は所々支離滅裂で読みにくい。が、取り敢えず本人の行動や記憶さえ記録されていればなんとか作動するので問題はない。

「……ありがとう」

唐突に彼女が呟いた。

俺はきょとんとするがその意味を理解すると可笑しくなって笑わずにはいられなかった。

「悪魔に礼なんか言うんじゃないよ。俺、結構酷いことしてるんだぞ？ …………… 絶対に後悔することになる」

「でも、今の私は嬉しいから……………」

重ねて言われ、俺は呆れるしかなかった。

——駄目だ。呑気すぎる……………。

じつと見詰めていると、彼女は困惑の表情を浮かべた。

そして俺はふと思い出す。

「……………この日記帳だけど、お前が持つて生き返るのは無理だから、取りあえず俺が預かつとくぞ。お前が生き返ってから何らかの方法でお前のところに行くようにするから」

「何らかの方法って？」

「……………それはお楽しみだ」

まだ考えてはいない。後で必死に考えなければならぬだろう。

「っ……そろそろ日記の効果が出てくる。いいか？ この日記のことや俺のことは絶対に誰にも言っな。分かったな？」

苦し紛れに言うと、彼女は微笑した。

「うん。約束する」

俺はその笑顔につられるようにして笑う。

そして彼女の姿は霧散し、消えていった。日記の効果がようやく出たのだ。

「……………まさか、礼を言われるとは思ってなかった」

朱音のいなくなった現世と黄泉の狭間で、俺は先程のやりとりを思い出し、苦笑した。

「……………朱音。本当のことを言ったら、どんな顔をするかな？」

言ってしまったえば、そのまま日記を使うなんてことは、あの優しい性格をした彼女には無理だろう。

むしろ、使ったことを後悔するに違いない。

「でも、俺にはこつするしかなかったんだ——」

誰もその呟きを耳にする者は無く、俺は痛む心を忘れようとした。
。

まさか（後書き）

前書きにも書いた通り、タイトルを一部変更しました。……と、言ってもほんの少しですが。

僕等が求めたモノ　と少しタイトルが似ていたので……。

彼女の微笑み

どうやって現世に蘇った彼女に日記帳を渡すか。

しばらく考えた結果――。

「お前、本当に大丈夫なのかよ？」

俺はなるべく疑わしげに、ベッドにいる朱音にそう訊いた。

「大丈夫だよ」

彼女は微笑む。

時刻は午前十時を過ぎたところ。

朱音がこちらに戻ってきて約六時間が経過している。

今日は日曜日。

俺は彼女の前のいつもの姿——黒井燈亜くろい とつあとして朱音のいる病院に見舞いに來ていた。

「でも、車にはねられたんだろ？　なのに無傷って……」

「あはは……でも、しばらくは目を覚まさなかったみたいなんだけどね」

「……………事故にあっても、相変わらずその呑気さは無くならねーんだな」

彼女が戻って来る前も思ったが、やはり呆れるしかない。

朱音は苦笑して、俺はそんな彼女の様子に自然と笑む。

「ま、その香気ところが朱音の良いところでもあるんだけどな」

どんな時でも彼女が笑えば、暗い雰囲気でも周囲はそれにつられたように明るくなる。

何というか……心が温かくなるって感じ？

それは俺が彼女を好きになった理由の一つなんだ。

悪魔の精神

今から八年くらい前。

俺は悪魔達が住む魔界から、この人間界へとやってきた。

——正確には、捨てられた。

悪魔としての精神（こころ）が全く足りない。そう言つて、ある日俺の親は俺をこの人間界に引ッ張（ひきちが）つてきて、置き去りにして魔界へ帰って行った。

悪魔は「悪」でなければならない、と小さい頃に俺を捨てた両親は、耳にタコが出来そうなくらい何度も何度も言つてた。

分かつてるよ。それくらい。

悪魔は人の負の感情——怒り、悲しみ、憎しみ、等の感情——を糧として生きていくから。

だからためらいなく人を襲えるように、悪魔は他者のことなんかで心が痛んだりしない。

ただ、人が傷付く姿を見て、笑ってるんだ。

——だけど、俺は違ったんだ。

嘘の優しさ

知り合いの悪魔が人を襲っているのを見ていて、何度も心が痛んだ。

——時には涙が溢れる始末。

俺自身から誰かを傷付けるなんてことは怖くて全く出来なくて——。

それは悪魔としては必要ない、邪魔なだけの感情。

悪魔としての「欠陥」がある俺を、両親はいつも冷めた目で見ていた。

——そして、俺は捨てられた。

いつもなら「欠陥」のある俺に話し掛けてくることのない父親が、

優しく笑って「遊びに行こう」と誘ってきたんだ。

俺はそれが嬉しかった。

嬉しくて嬉しくて、差し出された父親の手を握った結果……人間界に連れてこられた。

初めてやってきた人間界。

魔界とは違う空気、景色……。瞳を輝かせる俺に、柔らかな声音で父親は訊いてきた。

「ここが気に入ったか？」と。

大きく頭を縦に振って、俺は頷いた。

それを見た父親は「そうか」と呟く。

——そして、いつものような冷たい表情を浮かべた。

「父さん……………」

急速に俺の中で不安が膨れ上がる。

父親は繋いでいた手を振り払い、俺を思い切り突き飛ばした。

幼い俺はその勢いで地面に尻餅をついてしまいながらも冷めた眼差しの父親を見つめる。

「お前は今日からここで生きろ。……………ここが気に入ったんだろう？」

父親が顔に現したのは見た者を凍り付かせてしまいそうなほど冷たい微笑み。

——俺は身動き出来なかった。

はつきりとした拒絶の意志があるのを感じた。

今日、俺に見せてくれた優しい微笑みは嘘だったのか。

——俺は、騙されていたのか。

その結論に至った時、既に父親の姿は目の前から消え失せていた。

——父親はきつと、一人で魔界に帰ってしまったんだ。

幼かった俺は、当時まだ魔界へ帰る術を会得していなくて……。

残された人間界の公園の中で、一人うずくまって泣いていた。

そんな時だ。

——彼女と出会ったのは。

嘘の優しさ（後書き）

一週間ぶりの投稿ですね。

最近忙しくて執筆する暇がなく、プロットを考える暇もないです。

おまけに中間テストも近付いているので次の投稿がいつになるか……。

中間テストまでに一話、投稿出来れば……と考えています。

太陽のようで（前書き）

テスト前に投稿出来たら……と思っていたのに、テスト期間の真っ最中に投稿です……。

太陽のようで

どれだけの時間が経ったのか分からない。

公園のあまり目立たない場所で声を殺し、泣き続けていた俺は、突然勢いよく降ってきた水によってずぶ濡れとなった。

「!？」

あまりにも突然のことで驚いた俺は、泣くのをピタリと止め、顔を上げる。

目の前には淡いピンクのワンピースを来た女の子。

歳は多分、俺と同じくらい。

可愛い容姿で、手には青いバケツを持っていた。

——俺がずぶ濡れになった原因は、おそらくこの少女だろう。

「……何、するんだよ」

訳も分からず水をぶっかけられて、ますます泣きそうだ。

「なんで……？　なんでいきなり……」

涙声で問い掛けると、少女は真剣な顔をする。

「男の子は簡単に泣いちゃダメ！」

——簡単なことで泣いてる訳じゃないんだけど。

俺はそう思いながらも理由なんて言わなかった。

言っても同情されるだけだ。それは嫌だった。

「……………で？　なんで水かけたの？　服、びしょびしょになったじゃん」

着ていた灰色のシャツは濡れたせいで色が濃くなってしまってい

る。

俺が少女を睨みながら文句を言つと、少女は笑った。

「だって、泣いてたから」

思わず「はあ？」と言い掛けた。

——泣いてる奴には水をかけていじめるのがこいつの趣味なのか？

そう考えていると、少女はさらに続けた。

「びしょ濡れなら、泣いてたの隠せるでしょ？」

——だからって、普通は知らない相手にいきなり水をぶっかけたりしないだろう……。

そう言ってやりたかったけど、彼女があまりにも無邪気な笑顔をしているので、その言葉は呑み込んだ。

こんな笑顔を向けられるのは初めてで、もう少し見ていたいと思った。

「ねえ。君、名前は？」

「……燈亜」

教えたのは本名ではないけれど、それを知らない彼女はますます笑顔になる。

「燈亜くんだね？ 私は朱音！ よろしくね！」

——ああ。温かい微笑みだ。

少女——朱音が浮かべる笑みは、まるで太陽のようで……。――

俺の涙はいつの間にか完全に止まって、代わりに彼女につられて、微笑が顔に浮かんでいた――。

太陽のようで（後書き）

……すみません。

なんか分かりにくくなってしまつて。

グダグダさがもう少し無くなるように頑張りたいです……（泣）

奪われた笑顔（前書き）

いつも短くてすみません……。。

奪われた笑顔

その日から俺は彼女と過ごすことが多くなった。

そうなつてから知ったのは出会ったあの時、彼女は父親を病気で亡くしてあまり経っていなかったのだということ。

家族についての話をした時、無理やり笑ったような顔で朱音はそれを話してくれた。

あの時の笑顔を見た時、俺は彼女を放っておく事が出来なくなった。

俺自身の事よりもこの少女の為に何かしてやりたいと思った。

彼女を守りたいと感じた。

——出来る事なら、ずっと傍に居たいと望んだ。

いつ、俺は自覚したのだろう。

その思いは次第に大きく膨らんでいき、やがて俺は悩まされた。

その思いが「恋」と呼ばれるものへと変わり、俺を苦しめるようになったのはいつからだっただろう。

表面上は“幼馴染み”として彼女と接してしても、内心はそれ以上の関係を求めている。

でもこの想いを打ち明ければ、彼女の返事によっては傍に居られな

くなるのでは——……。

だから、苦しくて辛くても俺はこの胸に秘めた想いを伝えようとは思わなかった。

ただ彼女の近くに居て、俺の心を救ってくれたあの笑顔を見続けられるなら——。

……——そう思っていたのに。

それはあまりにも突然に奪われてしまった。

奪われた笑顔（後書き）

ようやくトリアの過去の話終了です。

な…なんかグダグダです……。

気付かれませんように……（前書き）

再び病室のシーンです。

気付かれませんように……

さて、俺はここへ来た目的を果たさなければならぬ。

「ん？」

俺は少しわざとらしいか？　と思いながら首を傾げた。

「朱音、ベッドの下に何かある」

「え？」

朱音は俺の言葉に不思議そうに首を捻る。

「ちょっと待って」

椅子から立ち、床にしゃがんでベッドの下に手を伸ばし入れたところで、俺は朱音に気付かれないように軽くその手を振った。

するとその手には例の日記帳が現れる。

俺はそれを確かめると立ち上がり、朱音に日記帳を手渡した。

「あつ……」

朱音が目を見開く。

「何だこれ？ 朱音の名前が書いてあるけど……」

自然に、自然に思えるように注意しながら、俺は朱音に問う。

「落として気付かなかったのか？」

「あ、あはははははは……」

答える言葉が見つからないらしく、朱音は乾いた笑みで応じた。

——どうやら大丈夫そうだ。

「……ま、朱音らしいけど」

いつもどこか抜けている朱音は、よく俺を呆れさせる。だけど今回
回は感謝だ。

——でも、何の疑問も持たずに俺の演技が受けて入られて、やっぱり朱音に対して不安が拭えない。

多分、朱音以外の奴なら俺に不審なところがあるのに気付くのではないだろうか。

そう思うと、今日もいつもと同じように俺は溜め息を吐いた。

さて、俺が今日するべきことは終わった。

「それじゃ、元気そうだし、俺は帰る」

「うん、ありがとう燈亜」

朱音は微笑んで俺に礼を言う。

ズキン、と心が痛むけれど、俺はそれを無視。

俺は手を軽く振りながら、病室を後にした。

「朱音……………」

どうか彼女に気付かれませんように……………。

俺はただ、静かに願った。

原因は俺なんだ

朱音の所に行ってから数日後の月曜日。俺は学校に居た。

あの日から一日一人、この町では人が亡くなっている。

亡くなった人間の家族や親しい人達の嘆き、痛みの気配は悪魔である俺にははつきりと届いていた。

———
苦しい。

罪の意識が俺の胸の中で渦巻いて暴れ回っていた。

けれど、俺はこれが朱音を取り戻す代償なら……と逃げ出さずに
苦しみを耐えていた。

——そう、逃げてはいけない。

これは俺の我が儘が原因で起きたことなのだから。

「黒井、大丈夫か？」

必死になって感情を抑えついていると、遠慮がちに声を掛けてきた奴がいた。

「へ……？」

顔を上げると、よく会話する同じクラスの男子生徒——坂野が心配そうな目で俺を見ていた。

「青い顔してるけど……どこか体調でも悪いのか？」

「……俺、そんな酷い顔してる？」

どうやら心の内が表情に表れていたらしい。
俺は苦笑を浮かべる。

「大丈夫……。ちょっと寝不足なだけだって。深夜までゲームに熱中しててさー……。——結構レベル上げたのにラスボスに勝てねえんだけど」

「それはお前の戦略が悪いんじゃないの？ てか、寝不足だけでそこまで酷い顔になるなんて、お前どれだけデリケートなんだよ？」

「うるせーなー」

どうやら上手く騙せたらしく俺は安堵し、気分を変える為に顔でも洗いに行こうと席を立った時だった。

「ちよっ…………… 大変！ 大変だ！」

教室の入り口から勢いよく入ってきた男子生徒。

彼の顔は真っ青で、何か事件が起こったのだと教室に居た生徒は理解した。

「花田が……花田が階段から落ちて頭打って……」

花田とはこのクラスの生徒で明るい性格をした女子だ。

みんなからは好かれていて、だから教室は急に騒がしくなった。

そのざわめきに混じり、近付いてくる救急車のサイレン。

俺の心は、冷えていった――。

分らない

その二日後、退院したらしい朱音が登校してきた。

朱音は教室に入ってくるなり、とある一点を見詰めている。

それは花田の机。

その上には花が飾られた花瓶。

俺は立ち止まったままの朱音に近付く。

「燈垂、……これ、どうしたの？」

不安でいっぱいとはかりの朱音の顔。俺はちゃんと言わなければ
ならないと静かに言葉を紡いだ。

一昨日、そいつ。……階段から落ちて——打ち所が悪くて、死んだんだ。

俺ははっきりと言った。

花田は死んだ。
搬送された病院で、彼女は息を引き取った。

彼女を失って嘆き悲しむ人達の声は離れている俺に届き、俺は瞳から溢れる涙が止められなかった。

——
酷い罪悪感。

おまけに、身近にいる人間が死んだというショックは大きい。

——これも、あの日記の効果だ。

禁忌を犯して命を蘇らせた代償。

朱音に日記を書かせるのを止めさせない限り、何の罪もない人達の命は奪われていく。

けれど、書くのを止めさせたら、朱音はまた、この世からいなくなる。

俺にとって、朱音を失う方が辛い。

だから俺は罪悪感を殺そうと必死になっていた。

花田について俺が言った後、朱音は愕然とした表情をする。

「嘘……………でしょ？」

その言葉を首を振って否定し、俺はうつむきながら言った。

「本当だよ」

朱音は信じたくないばかりに、それきり口を閉ざした。

俺はそんな朱音を見ながら、「ごめん」と心の中で呟いた。

い。
その言葉は誰に対しての謝罪だったのかは、俺自身にも分からな

彼女には負ける

それからまた数日が経った。

俺は一度、悪魔——トリアとして朱音の所に行くことにした。

転移したのは彼女の部屋。

——無断だけど、俺の姿を誰かに見られる訳にもいかないから我慢して貰おう。

「最近の調子はどうだ？」

勉強机に向かっている朱音に俺は問う。

ちなみに俺の調子はあまり良くない。

ここ数日、罪悪感が俺をずっと苦しめてくれるせいで毎晩のように悪夢を見ていた。そのお陰で寝不足である。

彼女はそんな俺を一度見てから、恐る恐るといった風に口を開い

た。

「……………ねえ、最近の死亡事故って、この日記と関係しているの？」

俺は無理に浮かべていた笑みを思わず消した。

「……………何故、そう思う？」

「だって、私が生き返ってから毎日のように死ぬ人が出るなんて、さすがにおかしいじゃない」

朱音の答えを聞いて、俺はうつむいた。

「……………ああ、そうだな」

何故、俺は否定しなかったのだろう。

でも、もう彼女は勘付いてしまっている。きっと嘘を言っても通じない。

それに、彼女の瞳は言っていた。「本当のことを教えて」と。

……………俺は朱音だけには弱いんだ。

だから、俺は決意して——ゆっくりと彼女を見た。

「……………お前が考えた通り、最近の死亡事故とその日記帳は、関係

している」

右手の人差し指を、彼女の机に置かれている日記帳に向け、そして俺は真実を告げる。

「その日記は死者を生き返らせることが出来るが——同時に生者を殺す物でもある」

彼女の瞳が、驚愕に染まった。

彼女には負ける（後書き）

本当にもうすぐで最終話です。

そして明日も更新すると思います。

生け贄の日記

「その日記の名はサクリファイスダイアリー。……生け贄の日記だ。その力は名の通り、死者を蘇らせる代わりに生者を殺す」

「つまり、私は他人の命を使って、生き返っているってこと……」

朱音の表情が悲痛に歪む。

「ああ」

俺は肯定した。

朱音の表情は苦しそうで——俺はそれにつられて泣きたくない
った。

全ては自業自得。

俺の我が儘。

——俺の、馬鹿。

自分の行動をを恨んだ。

目の前の彼女に、俺の好きな表情はない。

——当たり前だ。彼女がこんな事を許すはずなんてないのだから。

彼女の笑顔を——今度は俺が奪ってしまった。

——ああ、俺は馬鹿だ。
愛しい人を、傷付けて——。

「どうして………言ってくれなかったの？」

責めるような、彼女の言葉。——心の痛みが強まった。

「言ったら、使わなかったらどう？」

彼女を取り戻すために、俺は嘘を吐いた。

色んな事を隠して、朱音にサクリファイスダイアリーを使わせた。

「……私、もうこの日記、使わない」

痛々しい表情のまま、彼女は日記を手に取り、それを俺の方へと差し出してくる。

その瞬間、きっと俺は保っていた無表情が崩れたと思う。

生け贄の日記（後書き）

明日も更新します。

サヨウナラ

「明日、母親の誕生日なんだろう？ ……いいのか？」

ふと俺は思い出し、彼女に訊いた。

その時にはもう、彼女の表情はしっかりと決意を浮かべていた。

「うん。 ……プレゼントはもう、買ってあるから——」

——朱音は強いな。

俺はそう思っ、涙が溢れそうになるのを必死に堪えた。

「 ……それに、他人の命を犠牲にしてまで生きていたいとは思わない。 ……そんなので命を得たって、嬉しくも何ともないし、幸せにもなれないと思うから」

朱音の言葉を聞きながら、俺はずっと唇を噛み締めていた。

この胸に押し込めた罪悪感、後悔——朱音を蘇らせてから溜めに溜めた感情が流れ出てきてしまいそう。

——でも、まだそれは塞き止めていなければならぬんだ。

俺はかなり無理に笑顔を浮かべた。

「——やっぱり、朱音ならそう言うと思ったよ」

朱音の優しさに救われ、朱音の強さに憧れ、朱音の笑顔に惹かれた。

俺は彼女へと手を伸ばした。

——サヨウナラ。朱音。

心の中で別れを告げる。

朱音の姿は空気に溶けるように形をなくしていった。

——そして、彼女は消滅した。

俺の元に残されたのは日記帳——サクリファイスダイアリーだけ。

それを開き、彼女の記した日記に目を通した。

終わりの方にはこの日記についての不安が綴られていたけど、それ以外の部分を読む限り生き返ってからの数日間、彼女が充実していた日々を送っていたことが分かる。

日記の内容は彼女の母親の誕生日についても多く書かれていて、俺はせめてもう少しの間は彼女の前に現れなければよかったとまた後悔した。

「朱音……」

俺は彼女の名を呟く。

その時にはもう、視界が霞んでいて、続けて日記を読むことが出来なかった。

開いた日記のページに、雫が滲んでいく――。

サヨウナラ（後書き）

次回、最終話です。

狂わせた歯車の再生（前書き）

最終話です！

狂わせた齒車の再生

再び現世から姿を消した少女の魂は黄泉へと下っていった。

それを確かめた後、俺はこの街で一番高いビルの屋上にいる。

そして、もう一度彼女の日記を読んだ後、俺は力任せにページを破った。

俺はあの後、決意していた。

——俺が狂わせた運命を元に戻そう、と。

まとめて破った日記帳のページを、ビルの上から地上へ向かって蒔く。

ひらひらと風に乗リ、揺れながら日記の切れ端は舞い落ちる。
その中で紙片は淡い光へと変わり、あちらこちらに散らばっていた。

——しばらくすれば、全ては元通りになる。

光が四方八方に散っていくのを見ながら、俺は呟いた。

「……………ずっと、好きだったんだよ」

この言葉を聞かせたい相手はもう、この世にいない。

だけど、俺は言わずにはいらなかった。

俺は仮の姿である黒井燈亜へと変わるとその屋上を後にし、ある場所に向かった。

俺が向かったのは——公園。

俺と朱音が最初に出会ったあの場所。

公園内には、もう日が暮れようとしているからなのか遊んでいる子供達の姿はなく、憩う人達も居ない。

この場所で俺の全ては始まったような気がする――。

俺は苦笑して、自分の手のひらを見た。

少しずつ、少しずつ、その手のひらは色を無くしていく。

手だけじゃない。俺の身体から色が徐々に消えていった。

――サクリファイスダイアリーの代償。

表紙に記された名の死者を日記を綴る事で蘇らせる代わりに――
――ジごとに生者を一人殺す。

そしてもう一つ。もし、日記の生け贄となった人々をこの世に取り戻すのならば蘇らせた死者は再び命を失い、サクリファイスダイアリーを生み出した者は肉体を無くし存在を消される。

これがこの禁術の代償。

朱音を取り戻す為なら他者の命なんて……と思うようになってきたけど、俺には無理だった。

だから、朱音を再び失った今、俺は狂わせた全ての歯車を元に戻そうと決めたんだ。

俺は奪った命をずっと背負っていけるほど、強くはないから――
――。

「……………今までありがとう」

最期に俺は感謝を口にした。

今、俺が望むのは俺が運命を狂わせた人達の幸せ。
そして、朱音が生まれ変わってからの幸せ――。

それは身勝手かもしれないけれど、願わずにはいらなかった。

—— ゆっくりと、瞳を閉じる。

そして俺の身体は完全に色を無くし、意識も溶けるように消えていった——。

生け贄にされた魂は、再び現世に取り戻され、本来消える運命^{さだめ}だった命がこの世から消えた。

世界は一人の少女を失い、再び元の齒車^{まわ}が廻る。

ただ一つ。一人の悪魔が存在したという記憶を人々から奪い去って――。

F i n

狂わせた歯車の再生（後書き）

この物語を読んでくださった皆さん。ありがとうございましたm
——）m

これで「Sacrifice Diary」ただ望むのは「は完結です。

この物語は「Sacrifice Diary」の悪魔——トリア視点を書いたものですが……………。

………… トリアを書くのが前作の朱音以上に辛かったです。

作者が思っていたより話が重くなってしまったような…………。

でも、辿り着いた結末は書き始めた時と変わっていません。

いつでもいいので、よろしければ感想等を頂けると嬉しいです。

読んでくださった皆さん、本当にありがとうございました！

紫夜河 太桜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6419k/>

Sacrifice Diary ~ただ望むのは~

2010年10月11日00時19分発行